

農村伝道神学校学報

学校法人 鶴川学院
農村伝道神学校
発行人 平良 愛香

始業講演

「都市／農村に根ざす解放の神学—開発、寄せ場、身体をめぐる」とその後

農村伝道神学校教師 有住 航



農伝の兼任教師となり、野津田の校地に週二回通いはじめ、半年がたちました。これまで授業以外で農伝に訪れることがほとんどなかったのですが、いまは農伝をとりまく環境にじっくりと身を置きながら、あちこち歩き回ったり、あれこれかんがえたりする日々を過ごしています。

わたしじしんはこれまで「農村」や「農」とほとんど触れあわずに生きてきたように思

います。いや、「触れあわずに生きてきた」と思い込んでいた」というのが正確かもしれません。大阪のインナーシティに生まれ育ち、その後もマニラや東京などの「都市」に生活基盤を置きつづけてきたわたしにとって、「農村」や「農」という視点は、あたらしく、重大な、これから取り組まなくてはならない大切な神学実践的課題だという思いをつよめています。

現在、『福音と世界』に連載している村澤真保呂さんは、近著である『都市を終わらせる—「人新世」時代の精神、社会、自然』（ナカニシヤ出版、2021年）のなかで、都市と農村の平行関係を指摘しています。都市という空間は、その面積の土地だけで維

持されているのではなく、都市の消費生活や産業活動を支えるための、都市以外の広大な場所が必要とされます。都市生活を支える食糧、エネルギー、労働力は、都市の「外部」、すなわち「農村」から調達／動員され、消費／使役されてきました。都市の拡大は農村の衰退と平行関係にあり、都市の力が増せば増すほど、農村は都市に従属させられ、搾取されていきます。このような都市と農村の分かれがたい結びつきや、とどまることのない都市の拡大のなかで農村がまるで都市機能の一部となつていくプロセスを村澤さんは「都市化」とよび、このような「都市化」への抵抗、「都市」から脱却の可能性を模索しています。

このような都市化のプロセスはヨーロッパ諸国からラテンアメリカ、アジア、アフリカへ出かけていった「世界宣教」の時代にはじまり、産業革命を経て急速に拡大してきました。国家による大規模な農地の囲い込みや天然資源

の採掘・採取、労働者の搾取と流動化、そして気候変動や原発の問題は、このような都市化のプロセスによって生み出されたものです。都市化の問題とキリスト教宣教は無関係どころか、たがいにつよく結びあいながら、世界中で深刻な問題を引き起こしつつあります。

都市と農村はたがいに分かちがたく結びつき、ともに「都市化」のプロセスに巻き込まれています。それゆえ、都市／農村をたんに物理的空間としてとらえるのではなく、都市／農村をつらぬく「都市化」という運動の総体を、その力学や政治性をふくめてラディカルに問いなおす必要があると感じています。

農村／都市に根ざす神学の「資料」は、聖書のなかに、キリスト教のあゆみのなかに、基地・原発・ダム建設反対運動の現場に、寄せ場に、(再)開発やジェントリフィケーションをめぐる闘争のなかに、たくさん見いだせるでしょう。

農村伝道神学校は「農村伝道」という歴史的な名称をもち、「農の視点」や「農の神学」という言葉を大切にし、これらを「教育の目標」として謳ってきました。農村伝道神学校がつづけてきた「農」にこだわりの「農村」という場所を見据えた神学・宣教は、世界中で進行する都市化の現実においていかなる意味を持ちえているのでしょうか。「農村伝道」の視点「農の神学」という歴史的な言葉を再検討することをとおして、都市そのものを批判的に問い、都市化のプロセスに抵抗する神学実践の可能性を、農伝につらなるみなさんとワイワイガヤガヤと語り合いたいです。

というようなことを4月の始業講演のなかですこしだけ分かち合いました。これから農伝にかかわるなかで、世界中ではたらく農伝関係者のみなさんの実践や経験や「資料」にたくさん学べることを心からたのしみしています。今春から数名で「農の神学」をじぶんなりの言葉でかんがえ、つむぎ、わかちあうための研究会をひっそりとはじめました。都市化に抵抗する神学実践や共同体形成を掘りおこし、育みたいと思っています。ぜひいっしょにまなびあいましょ。

安全保障関連法廃止！
辺野古新基地建設反対！

戦争責任シンポジウム報告 2年 高柳研二



今回の戦争シンポは「戦争責任と和解への道」を主題に6月7日に行われた。今年久しぶりに関田寛雄先生をお呼びした。先生も既にご高齢でおられ、お住まいも遠いことから依頼には躊躇もあったが、先生からは「農伝の為にあれば」ということで快くお引き受け頂いて今回の講演会が実現した。

午前の講演は「戦争責任とわたし」、午後の講演は「和解への道のり」。講演では先生が戦時中にクリスチャンが迫害されたことからいじめを受けぬように「日本人以上の日本人」(＝軍国少年)になるうとして教会や父親と距離を置

いたこと、そこから父親と和解し再び信仰が与えられ、牧会の道に進まれるまでのお話し、その後の在日コリアンとの出会いや、戦後に教団議長と共に謝罪のために韓国を訪れ、真摯な謝罪の言動によりその謝罪が受け入れられたこと、日本基督教団の功罪や日本の現在の問題(集団的自衛権や沖縄の基地等)について幅広く語られた。結局午前・午後共に関田先生のお話は1時間45分以上となったが、様々な経験を踏まえて語られる関田先生の言葉は最後まで力強く、またその内容もクリアで大変分かりやすく、質疑応答も活発になされる等、大変に学びの多いシンポジウムの時間となった。

修養会報告

2年 池田昌功

2022年7月13日(水)と14日(木)両日に修養会が開催された。13日は当校講師でもある杉山弘さんに、昨年に引き続きフィールドワークのガイドをお願いし、原町田(現在の町田駅周辺)界隈の戦後史を歩くと言うタイトルで

学びを積むことができた。午前中に資料に基づいての説明、午後からフィールドワークを行った。

散策箇所は6か所。①ジェット機墜落現場(1964年4月5日、町田市の商店街に、1機の米軍戦闘機が墜落した。これにより、20数軒の家屋が全半壊、4名の方が死亡、32名が負傷する大事故。墜落したのは米海兵隊岩国基地所属機で嘉手納基地を飛び立ち、厚木基地着陸直前の事故。高度約1800メートルから墜落した衝撃は大きく、地中深くに潜り込んだエンジンには回収不能となり、現在も地中深くに埋まったままとなっている。②勝楽寺釈迦堂(三橋國民 鎮魂祈禱館) 造形作家三橋國民氏の作品が展示、保管。氏は戦争で重傷を負うも生還。戦後、戦争と平和、鎮魂などをテーマとした作品を手がけている。③仲見世商店街(古書店ユイリカ) 旧町田街道沿いにあった市から、古物を扱う店だけが分離、当時は竹藪の広がっていた街道裏に古物市を開いたのが仲見世商店街の始まりとされる。④お召しホーム跡と行楽道路(座間町(現座間市)に建設された陸軍士官学校や、東京臨時軍事病院(現相模原病院)などへの行幸、行啓に備えて、

町田駅にはお召しホームが設けられ、また駅から士官学校へいたる道路(行幸道路)が建設。⑤旧「特飲街」(敗戦後、GHQのより公娼制度が廃止された後も、「特殊飲食店街」(赤線)では売春が公然と行われ、売春防止法が施行され、いったん寂れるが、ベトナム戦争が激化すると、非公然の売春行為がふたたび横行している。⑥「在日本朝鮮公民共同墓地」(青柳寺墓地の敷地内に「在日本朝鮮公民共同墓地」は建っている。26世住職八幡城太郎氏が建立したという伝聞があるが詳細は不明。

今回散策して思ったのは歴史の重みだった。戦争が多量の痕跡を残したことを垣間見た気がする。このような歴史の財産は知らなければ出会うこともなく、ジェット機墜落現場も現在は新しい建築が始まっており、現場を見るだけでは、そんな歴史があったとは誰も思わないであろう。この歴史を風化させないため母子像を造り設置する動きもあったが、維持管理が難しい。否定的な人もいるという理由から市に拒否された経緯がある。この母子像は一時農村伝道神学校にも保管されていた時期があったというのも驚きであった。農村伝道神学校が

在る町田市の歴史を知ること、はとも意義があることであり、事象を過去のものとして済ませるのではなく、現代にどう繋げて考えるかが大切なことのように思われる。

修養会第二日目(町田・朝鮮学校訪問)

2年 安田直人

西東京第二初中級学校を訪ねました。通っている子どもたちは、幼稚班(園児)、初級部(小学生)、中級部(中学生)です。校長先生が説明と案内をしてくださいました。

朝鮮学校の校舎は新しいのですが、公的な補助金がまったくなかったため、校地の一部を売り、加えて教師・保護者、在日朝鮮人同胞の寄付によっ



て建築されたのだそうです。校舎を一通り案内していただきました。出会う子どもたちが、日本語でも朝鮮語でも明るく元氣よく挨拶してくれて、嬉しい気持ちになりました。校長先生によれば、現在使用している教科書は文科省の教科書検定基準を満たしているものとのこと。そのような朝鮮学校の現状を見聞きすると、東京では石原都知事以降に補助金が打ち切られ、現在もそれが続いていることの不合理性を思わずにはおられません（いくつかの自治体が自分たちのできる範囲のことをしていきます）。

それも朝鮮学校の始まりは、戦時中に日本に連れてこられた（来た）朝鮮半島出身者による子弟への言語教育です。現在の新しい外国につながる子どもたちも、当然同様の課題を持っています。母語を維持することは、自分のアイデンティティを確立するために、最も重要だからです。この重要性はドーテの「最後の授業」を思い出せばよく分かります。この重要課題を、政治の問題にすり替えるのは、許されることはありません。また校長先生は、補助金打ちりと共に、チョゴリ（朝鮮服のスカート）を着用していた女子生徒が、そのチョゴリを来られた事件のことも話してくださいました。生徒たちの恐怖を考慮して、現在は、通学時には別の服を着て、登校後に着替えているのだそうです。これは補助金打ちりと合わせて考えるなら、明確なヘイトです。

これらは多くの自治体、多くの場所で、拉致事件の後に起こりました。怒りに任せてではなく、その時に立ち止まって、朝鮮半島からかくも多くの人々が、なぜ日本にやってきて暮らしているのかを考えるべきでした。韓国朝鮮籍の人々で約三〇万人、国際結婚等で日本籍になった人々を含めると約一〇〇万人の人々が、現在日本に暮らしているのです。拉致に対する責任の追求は大事でしょう。しかし同時に、在日韓国朝鮮人の歴史を知り、教育を保障し、差別のおきなない地域づくりを力尽くさなければなりません。日本には大きな戦争責任があるのです（もちろん、戦前に在日朝鮮基督教会を併合した過去を持つ、日本の教会にこそ）。

私たちはこの学校の存在に自分の存在を問われ、子どもたちの笑顔を思い出すたびに自らの恥を覚え続けるでしょう。その時、次の一歩が見えてくるかもしれません。

新任講師紹介



赤城 海

今年度、農村伝道神学校で新約概論と新約釈義を担当させて頂く赤城海と申します。2017年にセント・アンドリューズ大学（英国）で新約聖書学博士号を取得してから、複数の非常勤先で聖書学とキリスト教の授業を担当しております。専門はルカ文書で、第二神殿ユダヤ教のメシア思想、そして新約聖書における旧約聖書の使い方に特に関心があります。これから宜しくお願ひ致します。



安田真由子

4月から「新約特講」を担当しています。私が聖書学という学問に出会ったのは、小さい頃から通っていた教会の牧師にすすめられて進学したルーテル学院大学でした。以

来、なぜだか新約学に捕まってしまう、やがては博士号を取りに米国シカゴまで行く羽目に。5年半をシカゴで過ごし、昨年帰国しました。現在はあちこちで新約聖書やギリシア語を教えています。専門はルカ福音書と、フェミニストやクイア、ポストコロニアル批評です。教会や聖書学の中にあるジェンダー、セクシユアリティ関連の問題に頭を抱え、自分の非力さを嘆くばかりですが、せめて自分のできることを、とクイアな聖書解釈に力を注ぐ日々です。ポストモダンで「新しい」聖書の読み方は、頭を悩ませたり信仰を掻き乱したりもするものですが、これが「わたしの召命」なのだと思います。農伝での新たな出会いに感謝しつつ、今後よろしくお願ひいたします。

「新入生紹介」



安田直人

二年編入で入学した安田直人と申します。安田の安（アン）は、朝鮮半島から戦前に日

本にきた父方の名字です。祖国は朝鮮半島と日本にあるとおおまかには言えますが、ここが故郷と呼べる地はありません。この歳になるまで、約30回の引越しをし、各地を転々としてきたからでしょう。恐らく、行く先々で属し働いた教会が私の故郷だというのが、もっとも私の心に近いと思います。そもそも故郷というものは、私を育て、あるいは私が故郷を傷つけてしまい、私も故郷に傷つけられるという場所だと思えます。教会という故郷は小さいだけに余計にそうなのだと思います。それだけに愛も失敗も傷もイエスとの出会いも深く刻まれます。今までの故郷のひとつひとつを心に刻みながら、次の故郷に向かいたいと思います。主が旅路を導いてくださいますようにと祈りつつ。

校長より

前号で第14代目の校長として挨拶をする際、歴代の校長の名前を連ねたところ、「校長代行だった方もとても大切な役割を担ってくださいだったので嬉しい」とのコメントがありました。本当にその通りです。また、第五代校長の就任年の訂正が入りましたので、

今回修正を加え、改めて、代
行を含めた一覧を紹介したい
と思います。

- 第一代目 A・R・ストーン
(1948年4月)
- 第二代目 E・M・クラーク
(1951年3月)
- 第三代目 勝部武雄(1957
年4月)
- 代行 武藤健(1958
年4月)
- 第四代目 武藤健(1959
年4月)
- 代行 木俣敏副校長
(1967年4月)
- 第五代目 松本広(1969
年4月)
- 代行 清水恵三(1972
年8月)
- 第六代目 高倉徹(1972
年12月)
- 代行 國安敬二(1977
年8月)
- 第七代目 國安敬二(1978
年8月)
- 第八代目 柏井宣夫(1985
年8月)
- 第九代目 高橋敬基(1993
年8月)
- 第十代目 下田洋一(2001
年8月)
- 第十一代目 君島洋三郎
(2003年4月)
- 第十二代目 高柳富夫
(2011年4月)
- 第十三代目 R・ウイットマ

1 (2018年4月)
第十四代目 平良愛香
(2022年4月) どうぞよろ
しくお願いします。

同窓生等個人消息

任地が変わった等で掲載可
の連絡の取れた方を記載させ
ていただきます。移動など変
更のある同窓生の方がおられ
ましたら、神学校事務までご
連絡いただければ感謝です。
逝去

一 廣田昭信(神学科第二回
卒) 九月四日召天 九四歳
移動

一 吉武二郎(神37) 別野野
口教会辞任(引き続き代務)
二 柳田雅江(神39) 下関西
教会辞任
三 船水牧夫(神26) 信濃村
教会辞任
四 反町潤平(神61) 柚木教会・
ト教教育基金)

神辺教会を辞して八雲教会就任
五 井谷淳(神68) 上大岡教
会を辞して百人町教会就任

学事報告

◇六月七日(火) 戦争責任シ
ンポジウム 講師…関田寛雄
(報告参照)

◇七月十三〜十四日(水・木)
修養会(報告参照)

◇七月十五日(金) 前期授業
終了

◇夏期実習
後藤田由紀夫(経堂緑岡教会)
吉川拓実(アジア学院、会津
立農会)

高柳研二(水口教会)
安田直人(NCC教育部、マ
イノリテイ宣教センター、R
AIK(在日韓国人問題研究
所)、ACEF(アジアキリス
ト教教育基金))

2023年度入学案内

◆受験資格

- (1) 日本基督教団に限らずプロテスタント教
会に所属し、原則として受洗後1年以上
(洗礼式を行わない教派については、そ
れに準ずる)の教会生活をしている者。
- (2) 所属教会が推薦し(可能であれば)、高
卒または同等以上の学力を有すると認め
られる者。

◆修業年限

- 神学基礎コース：2年間(2年間で修了
することも可)。
基礎コース修了後、神学専門コースに進む
ことができる。
- 神学専門教職者養成コース：2年間
- 神学専門信徒宣教師養成コース：1年間
または2年間

◆学費

- 入学金 60,000円(入学時のみ)
- 授業料 240,000円(年額)
- 設備費 30,000円(入学時のみ)

◆受験手続

- 次の書類を期日までに郵送または持参す
る。
- (1) 入学願書(本校指定の書式)
- (2) 履歴書(本校指定の書式)
- (3) 教会(牧師または役員会)の推薦書(可
能であれば)
- (4) 最終学校卒業証明書(または卒業見込み
証明書)
- (5) 受験料 10,000円(振り込み)

◆入学願書受付

- 第1回 2022年10月18日(火)〜11月4日(金)
- 第2回 2023年1月17日(火)〜2月3日(金)

◆入学試験日時

- 第1回 2022年11月15日(火) 午前9時
〜午後3時
- 第2回 2023年2月14日(火) 午前9時
〜午後3時

◆会場 本校教室

◆入学試験科目 (1) 小論文 (2) 旧約聖書・ 新約聖書 (3) 面接

◎入学願書一式、過去の試験問題集は、本
校事務室まで請求ください(無料)。

農村伝道神学校

〒195-0063 東京都町田市野津田町 2024

Tel 042-735-5775 Fax 042-735-5711

Eメール : noden@pony.ocn.ne.jp

ホームページ : https://noden.ac.jp/

振替番号

学校法人鶴川学院 00140-7-635524

理事・評議員会報告

・前回報告から今までに3度の
理事・評議員会があり、いづれ
も生田教会にて開催された。主
な事柄は、予算決算や決算に加
えて、鶴川シオン幼稚園の園長
を元教師の加藤久幸牧師(所沢
みくに教会、神学科40回卒)
の就任を決定したこと。またそ
の鶴川シオン幼稚園は、園児が
減少しており認定こども園とし
ての立て直しへの議論に多くの
時間を費やした。なお、詳しい
事業報告と財務報告はホームペ
ージに記載する。(報告 瀬戸)

お知らせ

・昨年度まで学報と後援会報
は一緒に年4回発行していま
したが、今年度は、学報は5
月、9月、3月、後援会報は
5月、10月、3月の年3回発
行になります。(5月と2月

は同時に発行しますが、秋の
学報は入試に、後援会報はク
リスマスに間に合わせるため、
発行をずらすことになりました。
)。どうぞご了承ください。
・全国のアラやクヌギ等がキ
クイムシによって立ち枯れや
倒木を起こしており、農伝の
キャンパスにも被害が出てい
ます。人や建物に被害がでな
いよう、危険な木の伐採・除
去が始まりましたが時間的に
も体力的にも経済的にもかな
りの労力を要しています。祈
りにお覚え下さい。
・農村伝道神学校70年誌を紀
要34号として発行しました。
大変お待たせして申し訳あり
ません。
・複数あった郵便振替番号を
1つにまとめました。
学校法人鶴川学院00140-
71635524
よろしく申し上げます。